87 ◉常磐津三登勢太夫　後岸沢三登勢太夫（〆9番目半込）

半込神楽坂のそば屋の伜でそば清と云う。嘉永初年より控として番附に出る
安政四年七月中村座に豊後大掾、国太夫両人のワキを勤む、同六年
九月市村座には大掾のナガシ、その後も出勤せしが萬延元年四代目
古式部、家元と不和を生じ分立するや走り文久二年正月守田座に
古式部のワキを勤め明治四年頃死す（現今の式佐十三位十時なりと）
○三吉得意曰く美音と云う程でなく細い方なりしと。

88 ◉常磐津三登太夫

岸沢三蔵の弟子なり　安政四年七月中村座に豊後大掾のナガシを
勤む
○芸はよし　声は小音、芸風には不向き

89 ◉常磐津志喜太夫

文政四年六月中村座に国太夫のナガシ

90 ◉四代目常磐津綱太夫、　初め三代目八重太夫　細見〆14番　飯田町

神田桃太郎国子の伜なり、安政四年七月中村座に小文字太夫のナガシを勤む
安政六年四代目綱太夫を襲ぐ、勝栗の綱太夫と云い又無類の健脚家
なりしもて走り大黒と異名をとる
○林中未亡人談に曰く芝露月町に菓子店を営みいたり、声がよいだけの
太夫なりしと。

NO.
DATE

91 □常磐津綾瀬太夫
安政三年 歳旦本にそ名見中、安政四年七月中村座三番目に
國太夫の子かし、十月市村座に小文字太夫のナかしを語る
改代所の米屋の息子なり、萬延元年歳旦本に佐その名なし、
美音なりしと

92 □三代目常磐津文賀太夫 初め三代目喜美太夫
初名喜美太夫、安政四年七月中村座「三世相」上るに始めて小文字
太夫のナかしに出勤、安政六年 文賀太夫と改む

93 □常磐津 三國太夫 細見〆十番 石井
岩沢三蔵の弟子、嘉永五年六月中村座に始めて五代目小文字太夫の
ナかしを語る、安政四年六月中村座に國太夫のつキ

94 □常磐津 須磨太夫 細見〆十一番目 鳥越
安政三年十月森田座に小文字太夫のナかし、同四年中村座には同人の
つキを勤む

95 □三代目常磐津政太夫
弘化元年十一月市村座、三番目に娘道成寺を上勤、嘉永三年まで番附にあり
而して細見にはその名見えず

96

□常磐津山右門太夫

萬延元年正月市村座に出勤大接のナガし、文久三年までその名あり

慶応元年細見には鉄砲丁に住む、後田舎に引込む

97

□岸澤駒釜太夫

文久三年(円寿田座に岸沢吉弐郎のナカと語る

98

□初代常磐津都太夫

□二代目常磐津吾妻太夫 (文政八~明治三十九)

初め歌妻太夫

初名歌妻太夫明治元年の歳旦ようち正本に吾妻太夫と改めしと記す

本名堀田伊之助、銚子の漁師にて後江戸に出で、鉄砲洲の舟宿の

稲荷屋にて船頭をしゐる中に初代の吾妻太夫の弟子となり、安政三年

(三十三才)にて歌妻太夫となり、常磐津文字八の後家へ入夫す

明治二十六年十二月十二日しゐ九才にて歿す、浅草浄心寺々中一乗院に

葬る、誠諦内陣信士　桶屋二丁目に住む

99

□四代目常磐津喜代太夫

初め吾妻路富士太郎

始め廿三西窪に住み床屋と云う床屋稼業なりしが富士太郎と云う

吾妻路富士太夫の養子にして父の歿後富士太夫入らんと豊前太夫に交渉

ありしも床順の口にて破談となり常磐津に入門し、当時常磐津は吾妻

太夫、國太夫ありしも皆老齢にて適当の世話向きの太夫なき時とて文治元年

四月中村座興行より一躍ワキ語りに付きされ出勤ありしに無類の大声にて

出如新内なれば上手もあり、此の人のために代流の太夫迄圧せられしと、又当時

NO
DATE

芝居には高々一本位の調子なりしを此の人より三本位となりしと
麹町年町に住せり晩年横浜に移住し同地にて歿せり